

## 思い出25年分

\*

原 尚道 ● 原皮膚科医院（鎌倉市）

今までに車検を何回受けてきたのか思い出せないが、スカイラインとの生活が25年目に突入した。「32GT-R」の愛称を持つ平成6年式のスカイラインである。

30数年前、欧州や日本で人気のあったツーリングカーレースで勝つために、日産自動車が開発したレーシングカーのベースモデル。レースの車両規則で改造が許されない部分は市販車の状態で備えられている。スポーツカーではなく、もっと戦闘的なレーシングカーに近い存在。無敵の欧州自動車メーカーに挑戦するため生まれたその車に、自動車好き青年は熱狂した。平成2年からレースに参戦すると連戦連勝、当時の常勝車両であった欧州車を全く寄せ付けない速さ・強さを誇った。優劣がはっきりと表れる自動車レースで、欧州車コンプレックスを感じさせない初めての日本車になった。

平成元年の発売時からずっと憧れの車だった。本当に欲しいのはレース仕様車両、なんと車両5,000万円、エンジン別売り5,000万円で購入可能であった。一般向けの市販仕様でも日本車としては桁外れに高価な445万円であった。

そのような夢の車との生活は平成6年4月17日から始まった。翌月からは研修医としての生活も始まってしまったので、学生時代のようにヒマを見つけて箱根の山道へ走りに行くことはできなかった。遊びには使えなかったけれど、この車は私の皮膚科医修行生活にいつも寄り添うことになった。

1年目、北里大学病院の皮膚科病棟で研修医として勤務。病棟業務が終わっていても、いなくても、夜になると病棟チーフ以下のメンバーで食事会という名の飲み会に連れて行かれることがしばしばあった。酒の飲めない私は車を出す係、できることなら飲み屋ではなく丹沢付近の山道へ向かいたいところだが。

やがて飲み会は終了し解散、いつもは紳士淑女の

上司たちが陽気で、ちょっと羽目を外しがちになる。筋肉質でマッチョな某先生は、駐車場で私の車を見つけるとふざけてボンネットをグイグイ押している。なんとその手には車のキーが握られているではないか！ 哀れ、6ヶ月も経っていないほぼ新車のボンネットに、キーの金属でえぐられたスジ状のキズがくっきりと。酔った上司に文句は言えず、資金もないので修理はできず、たとえ資金があったとしても修理するとボンネット1枚全ての塗装になってしまう。オリジナルの塗装を極力維持したいので、タッチアップ塗料で自己補修。ミミズ腫れのように残るキズは今でも健在。

2年目、国立横浜病院へ出向。年末に結婚し、病院の独身寮から古淵の新居へ移る。マンション前の青空月極め駐車場を利用する。隣はファミレスとその駐車場で比較的明るい。

とある朝、駐車場に向かうと私の車が左側に傾いている？ いや違う、右側が高く持ち上げられている！ しかも右の前後タイヤがない！ タイヤ泥棒だ！ 頭の中が真っ白になりながら車を確認すると、右側の車体中央にジャッキが掛けられている。ジャッキポイントを無視して無理やり持ち上げたものだからサイドシルが潰れている。窃盗団に怒り倍増。左側はファミレスに面しているのに盗まれなかった模様。

警察を呼び、盗難届を出すも形式的な対応にガッカリする。後日ディーラーで修理、盗まれたホイールは1本8万2千円!! 盗品が流通するのも納得。潰されたサイドシルは板金修理が必要となる。オリジナル塗装に拘ってはいられず、板金塗装を了承。現在、再塗装部には細かなひび割れが出てきている。今でも心が痛い。

3年目、両国の同愛記念病院へ出向。都内の病院で車通勤が不可となった。病院敷地が狭く職員用の駐車スペースが少ない。毎日の首都高渋滞と通行料

の負担が過大。断腸の思いで電車通勤を始めた。が、やはり我慢できず土曜日だけ車で通勤してみた。早朝に古淵を発てば首都高は渋滞せず、楽しかった。病院駐車場もまだガラガラ。いけない事とは知りながら、こっそりと患者用駐車場に車を停めた。

ある土曜日の帰り、車に近付くと何かが違う。右のフロントフェンダーがわずかに歪んで見える。注視すると、全体的に押し込まれたような凹みが。浅いすじ状のキズも見て取れる。やられてしまったようだ、当て逃げか。幸いなことに塗装のダメージはないので最小限の変形でよしとする。きっとばちが当たったのだろう。これからも停め続けるのは抵抗があるなと思っていたら、皮膚科部長の計らいで土曜日だけ職員用駐車スペースを使用できることになった。

4年目、前半は昭和大藤が丘病院形成外科、後半は北里大学病院。2年前にタイヤとホイールを盗まれた、あの駐車場にはマンションが建っている。やや離れた月極め駐車場を利用。ホイールにはロック機能付きのナットを使用し、盗難防止対策を取っていたはずであった。

ある朝、車を発進させた。タイヤが1回転、2回転しないうちにガクッと左後輪付近が下がってしまった。何事かと見てみると左リアタイヤが外れている！ ロックされているはずの固定ナットがない！ 幸いにも極低速で外れたため、タイヤがホイールアーチに引っ掛かり車を支えてくれていた。残さ

れた地面との隙間にジャッキを入れ、車体を持ち上げてタイヤを装着。無傷のタイヤ3本から各1個のナットを外し3個でタイヤ固定した。2本ほど少ないが走行に支障なし。遅刻せずに助かった。

窃盗団はタイヤを持ち去る前に何らかの理由で退散したのだろう。問題は、ロック機能付きのナットが彼らに対して役立たずであったこと。より本格的な警報音付き盗難防止装置を装着する必要に迫られた。タイヤがめり込むように接触したホイールアーチは、一部がめくれ上がるように変形した。キズからサビが発生しないように、タッチアップペイントをたっぷりと塗って補修したが、めくれ上がりは今でも残る。

苦楽を共にしたエピソードはつきないが、いつの間にか25年が過ぎ、血気盛んな憧れスーパーカーは高齢車両になってしまった。ここ数年はエアコンやエアフローメーターなどの、大物で高額なメカニカルトラブルが頻発するようになった。まるで人間の病と同じように。当時は鳥肌が立つほどパワフルで、バカっ速い車だと思っていたが、今ではそれほどもなくなった。周りの車が速くなったのだ。昔ほど気力、体力を維持できなくなってきた自分の姿と重なる。

キズのひとつひとつにも忘れがたい記憶がある。私にとっては単なる車というよりも、熱かったり、ほろ苦かったりする、いとおいしい思い出そのものなのかもしれない。

